

本郷次雄先生の思い出

根田 仁

今関・本郷両先生の図鑑できのこに興味を持った私としては、本郷先生は今関先生と並び、私にとっては神様のような存在で、今後もそうあり続けるに違いありません。お恥ずかしいことというか、残念なことに、本郷先生とのおつきあいはそれほど深いわけではありませんでした。もっと身近で警戒に接したいと思いつつも、自らのあまりの不勉強・努力不足に恥じ入り、「先生にお会いする前に、自分でやることあるのではないか？」と悩むだけでした。先生のお住まいがある大津が距離的に縁遠いこともあり、「そのうち…」と思っているうちに年月を重ねてしまいました。「やはり、もっとお話をうかがうべきだった。」と後悔しているところです。

学会大会や観察会で、たびたびお会いしましたが、それ以外の時は、時間に余裕があったためでしょうか、親身に言葉をかけてくださることも多く、印象深い思い出となっています。1984年に滋賀大の先生の研究室にお邪魔した時は、大津の駅まで送り迎えしてくださり、標本やスケッチを見せてくださいました。やはり実物を見ると感動します。先生は、「どうぞ、どうぞ。標本もよろしかったら、分割してお持ち帰りになってください。」と言われ、ありがたく、いくつかの標本の一部をいただきました。当たり前ですが、貴重な文献もお持ちで、Singerの“The Agaricales in Modern Taxonomy, Lilloa 22 (1949年)、著者のサイン入り！」も、この時初めて目にし、



本郷先生・吹春先生と札幌の北大植物園にて、1984年9月

コピーさせていただくことができました。Singerのこの大著は1986年の第4版までありますが、Singerの分類体系の変遷を知る上で、この1949年版は重要で、きのこの分類体系が劇的に変革されることになった記念すべき論文です。しかし、日本には数部しかありません。

1992年にニュージーランドで一緒に調査できたのは、良い思い出でした。旅行前に土居先生から「本郷先生は、午前中だけ野外に行って、午後は宿で採集品の整理をされるから、根田君は、手当たり次第に採集してること。」と言われ、そのような採集旅行になりました。本郷先生は、少しずつでも確実に詳細に記載し、業績を積み上げてこられました。私は二兎どころか、十兎いや百兎を採ってしまうので、結局、モノにできるものは

殆どない有様です。このニュージーランド調査では、それほど重要なきのこは無かったようで、夜はお暇みたいでしたから、私は茶目っ気を出し、「先生、昼に本屋で、こちらの若い女性の写真集を買い求めましたので、いかがですか？」と、お見せすると、先生もお好きだったようで、「こういうものを嫌いだと言う男はいませんなあ...。」と鑑賞されていました。「お気に召したようでしたら、おみやげにされたいかがですか？私のような若造だと、成田の税関で見つかって没収されてしまうでしょうから。」と尋ねると、「いえ、いえ、こういうのは、ちょっと見るだけで十分です。」

1983 年に東京で第 3 回国際菌学会議が開催されました。会議に先立ち採集会が企画され、私もお手伝いをしました。その前年に、採集地の下見で安房小湊町の誕生寺の裏山をご案内しました。ここの照葉樹林は、熱帯系のきのこが数多く見られます。ニューギニア、小笠原、南紀の熱帯系のきのこの調査もされてきた先生には、興味を持っていただけたようでした。しかし、時期が良くなかったのか、その時はあまりきのこが発生しておらず、のんびりとしたハイキングになってしまいました。展望台で海を眺めながら、きのこ研究の話をうかがっていたら、通りがかりの（暇そうな）地元のおじさんが話しかけてきました。先生は、滋賀から来たこと、「きのこ」を仕事にしていることを伝えると、「ほお、普通の日には、こんなところまで来るくらいの暇があるとは、いい仕事ですねえ。」と、よほど暇な人だと思ったような口ぶりでした。よそ者の観光客はもちろん、地元の人も来ないような所には、はるばる関西から来ているわけですから。先生は、「へえ。そうですわ。結構な仕事をさせていただいていますう。」と答えられていましたが、最近になって、やっと私も「結構な仕事」をさせていただいているありがたさ、幸せを感じるようになりました。

最後になってしまいましたが、本郷先生が日本のきのこ研究の発展、きのこの知識の普及・啓蒙に果たされた業績は、計り知れないものがあります。その偉大さを尊敬し、ご努力に感謝しつつ、先生のご冥福を心からお祈りいたします。